



TITLE:

# Amenable位相群の表現について (表現論とIntertwining Operator)

AUTHOR(S):

酒井, 幸吉

---

CITATION:

酒井, 幸吉. Amenable位相群の表現について (表現論とIntertwining Operator). 数理解析研究所講究録 1976, 280: 31-49

ISSUE DATE:

1976-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/106043>

RIGHT:

## Amenable 位相群の表現について

鹿児島大学教養部 酒井幸吉

Amenable 局所コンパクト群  $G$  はその多くの性質によって、そうでない群と区別される。このことは  $G$  上に Haar 測度が存在することと、不変平均が存在することの重ね合せの結果として理解できる (F. P. Greenleaf [5], H. Reiter [9, ch. 8]). 一般に位相群  $G$  上に不変平均の存在だけを仮定した場合はどうであろうか。たとえば次の結果は不変平均を用いて示される典型的なものである (J. Dixmier [3], M. M. Day [2], M. Nakamura and Z. Takeda [7]): "Amenable 群  $G$  の Hilbert 空間  $H$  上へ、 $\alpha$ -様有界かつ強連続な表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(H)$  は unitary 表現に相似になる。すなわち invertible, selfadjoint, positive な  $B \in \mathcal{L}(H)$  が存在して  $U_g \equiv B T_g B^{-1}$  ( $\forall g \in G$ ) は unitary になる."

この報告では, amenable 群  $G$  上のベクトル値及び線形作用値関数の不変平均に関する積分を考え,  $G$  の線形表現のいくつか特徴的な性質についてのべる。以下  $G$  は常に位相群を表

わし、文中で扱う位相線形空間は Hausdorff 的であり、その係数体は実又は複素数体であるとする。

### § 1 Amenable 群

$B(G)$  [ $CB(G)$ ] は  $G$  上の複素数値有界 [かつ連続] な関数全体のつくる (Sup ノルムに関する) Banach 空間とする。  $\mathcal{O}$  は  $B(G)$  の閉線形部分空間で次の (1.1) ~ (1.3) をみたすものとする:

(1.1) 定数値関数  $I_G(g) = 1$  ( $g \in G$ ) は  $\mathcal{O}$  に属する,

(1.2)  $f \in \mathcal{O} \Rightarrow \bar{f} \in \mathcal{O}$ , ただし  $\bar{f}(g) = \overline{f(g)}$  の共役複素数 ( $g \in G$ ),

(1.3)  $f \in \mathcal{O}, s \in G \Rightarrow sf, f_s \in \mathcal{O}$ , ただし  $sf(g) = f(sg)$ ,  $f_s(g) = f(g s)$  ( $g \in G$ ) とする。

たとえば  $CB(G)$  は (1.1) ~ (1.3) をみたしている。いま  $\varphi \in \mathcal{O}^*$  が次の (1.4) (1.5) をみたすとき,  $\varphi$  は  $\mathcal{O}$  上の平均 と言う:

(1.4)  $\varphi \geq 0$ ,

(1.5)  $\|\varphi\| = \varphi(I_G) = 1$ .

平均  $\varphi$  は次の性質をもつことか上の (1.4), (1.5) より導かれる:

(1.6)  $\varphi(\bar{f}) = \overline{\varphi(f)}$  ( $\forall f \in \mathcal{O}$ )

(1.7)  $\inf \{f(g); g \in G\} \leq \varphi(f) \leq \sup \{f(g); g \in G\}$  ( $\forall$  実数値関数  $f \in \mathcal{O}$ ).

いま  $s_1, s_2, \dots, s_n \in G$  及び  $\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n > 0, \sum_{i=1}^n \lambda_i = 1$  を与えて,  $\varphi = \sum_{i=1}^n \lambda_i \delta_{s_i}$  i.e.,  $\varphi(f) = \sum_{i=1}^n \lambda_i f(s_i)$  ( $f \in \mathcal{O}$ ) によって定まる平均を  $\mathcal{O}$  上の有限平均 と言う。  $\mathcal{O}$  上の平均及び有限平

均の全体をそれぞれ  $M(\mathcal{O})$ ,  $M_f(\mathcal{O})$  とかくことにする.  $\forall s \in G$   
 及び  $\forall \varphi \in \mathcal{O}^*$  に対して,  $s\varphi, \varphi s \in \mathcal{O}^*$  且  $s\varphi(f) = \varphi(sf)$ ,  $\varphi s(f) = \varphi(f_s)$  ( $\forall f \in \mathcal{O}$ ) によって定義する. いま

$$\text{LIM}(\mathcal{O}) = \{ \varphi \in M(\mathcal{O}); s\varphi = \varphi (\forall s \in G) \},$$

$$\text{RIM}(\mathcal{O}) = \{ \varphi \in M(\mathcal{O}); \varphi s = \varphi (\forall s \in G) \}$$

とおき,  $\text{LIM}(\mathcal{O})$  [ $\text{RIM}(\mathcal{O})$ ] の元を  $\mathcal{O}$  上の左[右]不変平均, 特に  $\text{LIM}(\mathcal{O}) \cap \text{RIM}(\mathcal{O})$  の元を  $\mathcal{O}$  上の両不変平均という.

定義 1  $\text{LIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$  [ $\text{RIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$ ] のとき,  $\mathcal{O}$  は left  
 [right] amenable であるという, 更に  $\text{LIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$  かつ  $\text{RIM}(\mathcal{O})$   
 $\neq \emptyset$  のとき  $\mathcal{O}$  は amenable であるという. 特に  $\text{CB}(G)$  が ame-  
 nable のとき, 位相群  $G$  は amenable (A) 群と略記) であるとい  
 う.

注意. (1)  $\mathcal{O}$  が次の (1.8) を満たすとする:

$$(1.8) \quad f \in \mathcal{O} \Rightarrow \check{f} \in \mathcal{O}, \quad \text{ただし } \check{f}(g) = f(g^{-1}) \quad (g \in G).$$

このとき,  $\text{LIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset \Leftrightarrow \text{RIM}(\mathcal{O}) \neq \emptyset$  であるから,  $\mathcal{O}$  が  
 left 又は right amenable ならば, 自動的に  $\mathcal{O}$  は amenable にな  
 る.  $\text{CB}(G)$  は (1.8) を満たすから,  $\text{LIM}(\text{CB}(G)) \neq \emptyset$  又は  $\text{RIM}$   
 $(\text{CB}(G)) \neq \emptyset$  ならば,  $G$  は amenable になる.

(2)  $\text{CB}(G)$  の代りに  $B(G)$  が amenable であるとき,  $G$  は  
 amenable であると呼ばれることもある. このときは amenable  
 群のクラスはややせまくなり, 位相群であることの意味がう

すらくことになる。従ってこの報告では定義1のように amenable 群を定めることにする。】

(A)群の例 (1) コンパクト群, 可解群は(A)群である。特に可換群は(A)群である。

(2)  $G$  は局所コンパクトで,  $G_0$  は  $G$  の単位元の連結成分,  $N$  は  $G_0$  の最大連結可解正規部分群 ( $G_0$  の根基) とする。いま  $G/G_0$  はコンパクトであるとする。このとき  $G$  が(A)群であるための必要十分条件は  $G/N$  がコンパクトになることである (N. W. Ricker [10])。従って, 連結半単純群 (i.e.  $N = \{\text{単位元}\}$ ) が amenable になるのはコンパクトのときに限る。

## §2 バクトル値及び線形作用素値関数の平均に関する積分

$V$  は局所凸位相線形空間 (LCTV空間と略記) とする。  $ACV$  の convex hull 及びその closure を  $Co(A)$  及  $\overline{Co}(A)$  とかくことにする。写像  $f: G \ni g \mapsto f(g) \in V$  で次の (2.1) (2.2) を満たすものの全体を  $C(G, V)$  と表わす:

(2.1)  $C(f) \equiv \overline{Co}(f(g); g \in G)$  は弱コンパクト,

(2.2)  $\forall z \in V^*$  に対して,  $G$  上の関数  $\langle f(g), z \rangle$  は連続。

また  $M(CB(G)), M_f(CB(G))$  を簡単のためそれぞれ  $M(G), M_f(G)$  とかくことにする。

補題1  $f \in C(G, V)$  とする。  $\forall \varphi \in M(G)$  に対して,  $\varphi(f) \in C(f)$  で (2.3) を満たすものが一意的に存在する。

$$(2.3) \quad \langle \varphi(f), z \rangle = \varphi(\langle f(g), z \rangle) \quad (\forall z \in V^*).$$

こゝの  $\varphi(f)$  は  $f$  の  $\varphi$  に関する積分という。

証明  $\varphi(f)$  の一意性は (2.3) より明らかだから、その存在をいふ。まず  $\varphi \in M_+(G)$  で  $\varphi = \sum_{i=1}^n \lambda_i \delta_{s_i}$  ( $\lambda_i > 0, s_i \in G$  ( $i=1, 2, \dots, n$ ) で  $\sum_{i=1}^n \lambda_i = 1$ ) とする。  $\forall z \in V^*$  に対して

$$\varphi(\langle f(g), z \rangle) = \sum_{i=1}^n \lambda_i \langle f(s_i), z \rangle = \langle \sum_{i=1}^n \lambda_i f(s_i), z \rangle$$

であるから  $\varphi(f) = \sum_{i=1}^n \lambda_i f(s_i) \in C(f)$  とすればよい。次に  $\varphi \in M(G)$  とする。  $M_+(G)$  は  $M(G)$  の中で  $w^*$ -dense だから  $\varphi = w\text{-}\lim_{\alpha} \varphi_{\alpha}$  なるネット  $\{\varphi_{\alpha}\} \subset M_+(G)$  が存在する。上でみたことより、各  $\varphi_{\alpha}$  に対して (2.3) をみたす  $\varphi_{\alpha}(f) \in C(f)$  が対応する。いま  $C(f)$  は弱コンパクトだから  $\{\varphi_{\alpha}(f)\}$  の部分ネット  $\{\varphi_{\beta}(f)\}$  である実  $f_0 \in C(f)$  に弱収束するものがある。このとき、  $\forall z \in V^*$  に対して

$$\begin{aligned} \langle f_0, z \rangle &= \lim_{\beta} \langle \varphi_{\beta}(f), z \rangle = \lim_{\beta} \varphi_{\beta}(\langle f(g), z \rangle) \\ &= \lim_{\alpha} \varphi_{\alpha}(\langle f(g), z \rangle) = \varphi(\langle f(g), z \rangle). \end{aligned}$$

従って  $\varphi(f) = f_0$  とすればよく、  $\varphi(f) = w\text{-}\lim_{\alpha} \varphi_{\alpha}(f)$  である。 QED.

$V_1, V_2$  は LCTV 空間とし、  $V_1$  から  $V_2$  への連続線形写像の全体を  $\mathcal{L}(V_1, V_2)$  とする。  $\mathcal{ACL}(V_1, V_2)$  に対して  $\mathcal{Co}(A)$  の weak operator 位相に関する closure を  $wop\text{-}\overline{\mathcal{Co}(A)}$  とかく。写像  $T: G \ni g \rightarrow T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$  は弱連続 i.e.,

$$(2.4) \quad \forall v \in V_1, \forall z \in V_2^* \text{ に対して, } G \ni g \mapsto \langle T_g v, z \rangle \text{ は連続,}$$

であり、更に weakly almost periodic (wap と略記) i.e.,

(2.5)  $\forall v \in V_1$  に対して  $\overline{C_0}(T_g v; g \in G)$  は弱コンパクトであるとする。このとき,  $\forall v \in V_1$  に対して写像  $G \ni g \mapsto T_g v \in V_2$  は  $C(G, V_2)$  に属するから, この補題 1 を適用すると次の補題が従う。

補題 2 写像  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$  は弱連続かつ w.a.p. であるとする。  $\forall \varphi \in M(G)$  に対して,  $V_1$  から  $V_2$  への線形写像  $\varphi(T)$  及びネット  $\{T_\alpha\} \subset C_0(T_g; g \in G)$  が存在し次の (2.6), (2.7) が成立する:

$$(2.6) \quad \langle \varphi(T)v, z \rangle = \varphi(\langle T_g v, z \rangle) \quad (\forall v \in V_1, \forall z \in V_2^*),$$

$$(2.7) \quad \varphi(T)v = w\text{-}\lim_\alpha T_\alpha v \in \overline{C_0}(T_g v; g \in G) \quad (\forall v \in V_1).$$

この  $\varphi(T)$  は一意的であり,  $T$  の  $\varphi$  に関する積分という。

補題 3 写像  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$  は弱連続, w.a.p. かつ  $\{T_g; g \in G\}$  は同等連続であるとする。このとき  $\varphi \in M(G)$  に関する  $T$  の積分  $\varphi(T)$  は連続写像になり  $wop\text{-}\overline{C_0}(T_g; g \in G)$  に属する。

証明  $\mathcal{N}_1, \mathcal{N}_2$  はそれぞれ  $V_1, V_2$  の原点における基本凸近傍系とする。  $\forall \Pi_2 \in \mathcal{N}_2$  に対して,  $W_2 \in \mathcal{N}_2$  及び  $\Pi_1 \in \mathcal{N}_1$  を  $W_2 + W_2 \subseteq \Pi_2$ ,  $T_g(\Pi_1) \subseteq W_2$  ( $\forall g \in G$ ) なるようにえらぶことができる。このとき  $T_0(\Pi_1) \subseteq W_2$  ( $\forall T_0 \in C_0(T_g; g \in G)$ ) になる。  $v \in \Pi_1$  とすると,  $\varphi(T)v \in \overline{C_0}(T_g v; g \in G)$  だから,  $T_0 \in C_0(T_g; g \in G)$  で  $\varphi(T)v - T_0 v \in W_2$  なるものが存在する。従って,

$$\varphi(T)v = (\varphi(T)v - T_0 v) + T_0 v \in W_2 + W_2 \subseteq \Pi_2$$

故に  $\varphi(T)(\Pi_1) \subseteq \Pi_2$  となり, (2.7) より  $\varphi(T) \in \text{wop-}\bar{C}_0(T_g; g \in G)$ . QED.

いま写像  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$  が 一様有界 であるとは,  $V_1, V_2$  が Banach 空間であり,  $\sup \{\|T_g\|; g \in G\} < \infty$  のときという. このとき  $\{T_g; g \in G\}$  は同等連続だから補題 2, 3 より次の補題を与える.

補題 4 写像  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$  は弱連続, wop か 一様有界 であるか,  $V_1, V_2$  が Hilbert 空間で  $T$  は弱連続か 一様有界 であるとする. このとき  $\varphi \in M(G)$  に関する  $T$  の積分  $\varphi(T)$  は  $\text{wop-}\bar{C}_0(T_g; g \in G)$  に属し,  $\|\varphi(T)\| \leq \sup \{\|T_g\|; g \in G\}$  をみたす.

補題 5 写像  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V_1, V_2)$  は弱連続か 一様有界 であるとする. このとき  $\forall \varphi \in M(G)$  に対して,  $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V_2^*, V_1^*)$  で次の (2.8), (2.9) をみたすものが一意的に存在する:

$$(2.8) \quad \langle v, \varphi(T^*)z \rangle = \varphi(\langle T_g v, z \rangle) \quad (\forall v \in V_1, \forall z \in V_2^*),$$

$$(2.9) \quad \|\varphi(T^*)\| \leq \sup \{\|T_g\|; g \in G\}.$$

証明  $\forall z \in V_2^*$  に対して,  $\text{w}^*\text{-}\bar{C}_0(T_g^* z; g \in G) \subset V_1^*$  は  $\text{w}^*$ -コンパクトだから, 写像  $G \ni g \mapsto T_g^* z \in V_1^*$  に補題 1 を適用すると, (2.8) をみたす  $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V_2^*, V_1^*)$  が一意的に定まる. 更に (2.8), (1.5) より  $\varphi(T^*)$  は (2.9) をみたしている. QED.

以下  $CB(G)$  上の左又は右不変平均に関する  $G$  上のベクトル値又は線形作用素値関数の積分を考へることによつて導かれるいくつかの結果をのべる.



## §3 Amenable群の Cohomology

$V$  は LCTV 空間とする.  $G$  の  $V$  上への表現  $T: G \ni g \rightarrow T_g \in \mathcal{L}(V) = \mathcal{L}(V, V)$  は弱連続かつ Wap であるとする.  $Z(G, T, V)$  は  $f \in C(G, V)$  ((2.1), (2.2) 参照) で

$$(3.1) \quad f(sg) = T_s f(g) + f(s) \quad (\forall s, g \in G)$$

をみたすものの全体とする.  $v \in V$  に対して  $\partial v \in C(G, V)$  を  $\partial v(g) = T_g v - v$  ( $g \in G$ ) によって定めると,  $\partial v \in Z(G, T, V)$  になり, 写像  $\partial: V \ni v \rightarrow \partial v \in Z(G, T, V)$  が定義される.

定理 1 (A)群  $G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  は弱連続かつ Wap であるとする. このとき  $\forall f \in Z(G, T, V)$  に対して,  $v \in C(f) = \overline{\text{co}}(f(g); g \in G)$  が存在して  $f = -\partial v$  になる. 従って写像  $\partial: V \rightarrow Z'(G, T, V)$  は surjective である.

証明  $\varphi \in \text{LIM}(CB(G))$  とする.  $f \in Z(G, T, V)$  とし,  $f$  を  $\varphi$  に関する積分  $v \in C(f)$  とすると,  $\forall s \in G, \forall z \in V^*$  に対して, (2.3), (3.1), (1.5) 及び  $\varphi$  の左不変性より

$$\begin{aligned} \langle -\partial v(s), z \rangle &= \langle v - T_s v, z \rangle = \langle v, z - T_s^* z \rangle \\ &= \varphi_g(\langle f(g), z - T_s^* z \rangle) = \varphi_g(\langle f(g) - T_s f(g), z \rangle) \\ &= \varphi_g(\langle f(g) - f(sg) + f(s), z \rangle) = \langle f(s), z \rangle. \end{aligned}$$

よって  $f = -\partial v$  である.

QED.

注意 A. Guichardet [6] はコンパクト群の unitary 表現に対して定理 1 が成立することを示し, 更に (A)群の unitary 表現に

ついても同様であることを注意している。一方任意の位相群  $G$  に対して、その弱連続、wap かっ 同等連続な表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  に対応する写像  $\partial: V \ni v \mapsto \partial v \in \mathcal{Z}(G, T, V)$  は surjective になる (酒井 [12])。これは  $G$  上の弱概周期関数の全体  $WAP(G)$  が amenable であること (R. B. Burckel [1]) 及び  $u, \forall z \in V^*, \forall f \in \mathcal{Z}(G, T, V)$  に対して、 $\langle f(g), z \rangle \in WAP(G)$  になることからいられる。

$G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  は wap かっ 次の (3.2) を満たすとする:

(3.2)  $G \times V \ni (g, v) \mapsto T_g v \in V$  は連続。

このとき Cochain 複体  $\{C^n(G, T, V), \partial^n\}_{n=0,1,\dots}$  を次のように定める:  $C^0(G, T, V) = V$  とし、 $n \geq 1$  のとき  $C^n(G, T, V)$  は写像  $f: G^n = \underbrace{G \times G \times \dots \times G}_{n \text{ 個}} \rightarrow V$  で次の (3.3), (3.4) を満たすもの全体のつくる線形空間とする。

(3.3)  $\overline{C_0}(T_g f(g_1, \dots, g_n); g, g_1, \dots, g_n \in G)$  は弱コンパクト,

(3.4)  $\forall \varepsilon > 0, \forall z \in V^*, 1 \leq k \leq n$  及び  $g_1, \dots, g_{k-1} \in G$  に対して、

$G$  の単位元の近傍  $W$  が存在して

$$\sup_{s \in W, h_k, \dots, h_n \in G} |\langle f(g_1, \dots, g_{k-1}, s, h_k, h_{k+1}, \dots, h_n), z \rangle - \langle f(g_1, \dots, g_{k-1}, h_k, \dots, h_n), z \rangle| < \varepsilon$$

となる。

一方線形写像  $\partial^n: C^n(G, T, V) \ni f \mapsto \partial^n f \in C^{n+1}(G, T, V)$  は

$$(3.5) \quad \partial^n f(g_1, \dots, g_{n+1}) = T_{g_1} f(g_2, \dots, g_{n+1}) +$$

$$+ \sum_{i=1}^n (-1)^i f(g_1, \dots, g_{i-1}, g_i g_{i+1}, g_{i+2}, \dots, g_{n+1}) + (-1)^{n+1} f(g_1, \dots, g_n)$$

によって定める.  $T$  が  $\text{Wap}$  かつ (3.2) をみたすことより  $\partial^n f \in C^{n+1}(G, T, V)$  であることがわかる. また代数的計算によって  $\partial^{n+1} \cdot \partial^n = 0$  ( $n \geq 0$ ) がえられる. 従って

$$Z^n(G, T, V) = \text{Ker } \partial^n, \quad B^n(G, T, V) = \text{Im } \partial^{n-1} \quad (n \geq 1)$$

とよく,  $B^n(G, T, V) \subseteq Z^n(G, T, V)$  であり,  $H^n(G, T, V) \cong Z^n(G, T, V) / B^n(G, T, V)$  ( $n \geq 1$ ) とよく.

定理 2 (A) 群  $G$  が  $\text{Wap}$  かつ (3.2) をみたす表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  に対して,  $H^n(G, T, V) = \{0\}$  ( $n \geq 1$ ) である.

証明  $\varphi \in \text{LIM}(CB(G))$ ,  $f \in Z^n(G, T, V)$  とする.  $g_1, \dots, g_{n+1} \in G$  に対して,  $\tilde{f}(g_1, \dots, g_{n+1}) \in V$  は  $f(g_1, \dots, g_{n+1}, h) \in h \in G$  の関数とみなして  $\varphi$  に関する積分値とする. このとき  $\tilde{f} \in C^{n+1}(G, T, V)$  であることは容易に検証できる. (3.5),  $\partial^n f = 0$  及び  $\varphi$  の左不変性に注意して  $\partial^{n+1} \tilde{f}$  を計算すると,  $\forall z \in V^*$  に対して

$$\begin{aligned} \langle \partial^{n+1} \tilde{f}(g_1, \dots, g_n), z \rangle &= \varphi_h(\langle T_{g_1} f(g_2, \dots, g_n, h), z \rangle) + \\ &+ \sum_{i=1}^n (-1)^i \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{i-1}, g_i g_{i+1}, g_{i+2}, \dots, g_n, h), z \rangle) \\ &+ (-1)^n \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n-1}, h), z \rangle) \\ &= (-1)^{n+1} \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n-1}, g_n h), z \rangle) + (-1)^n \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n-1}, g_n), z \rangle) \\ &+ (-1)^n \varphi_h(\langle f(g_1, \dots, g_{n-1}, h), z \rangle) \\ &= (-1)^n \langle f(g_1, \dots, g_n), z \rangle \end{aligned}$$

$$\therefore f = (-1)^n \partial^{n-1} \tilde{f} \quad \therefore H^n(G, T, V) = \{0\}.$$

QED.

## §4 性質 P

$G$  の Hilbert 空間  $\mathcal{H}_i$  上への連続な unitary 表現  $T^i: G \ni g \mapsto T_g^i \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_i)$  ( $i=1, 2$ ) に対して,  $T^1$  と  $T^2$  に関する intertwining 作用素の全体を  $I(T^1, T^2)$  とする. すなわち  $I(T^1, T^2) = \{B \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2); BT_g^1 = T_g^2 B \ (\forall g \in G)\}$  とする. また  $\mathcal{H}_1$  から  $\mathcal{H}_2$  への Hilbert-Schmidt 線形作用素の全体を  $HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  とし,  $A \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  の Hilbert-Schmidt ノルムを  $\|A\|$  で表わす.

定理 3  $T^i: G \ni g \mapsto T_g^i \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_i)$  ( $i=1, 2$ ) は (A) 群  $G$  の Hilbert 空間  $\mathcal{H}_i$  上への連続な unitary 表現とする. このとき  $\mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  上の線形写像  $P$  で次の性質 (4.1) ~ (4.4) を満たすものが存在する:  $\forall A \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  に対して

$$(4.1) \quad P(A) \in \text{wop-}\overline{C_0}(T_g^2 A T_{g^{-1}}^1; g \in G), \quad \|P(A)\| \leq \|A\|,$$

$$(4.2) \quad P(A) \in I(T^1, T^2), \quad P(P(A)) = P(A),$$

$$(4.3) \quad P(B_2 A B_1) = B_2 P(A) B_1 \quad (\forall B_i \in I(T^i, T^i) \ (i=1, 2)),$$

$$(4.4) \quad A \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2) \Rightarrow P(A) \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2), \quad \|P(A)\| \leq \|A\|.$$

証明  $\varphi \in \text{LIM}(CB(G))$ ,  $A \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  とする. 補題 4 より, 写像  $G \ni g \mapsto T_g^2 A T_{g^{-1}}^1 \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  の  $\varphi$  に関する積分を  $P(A)$  とすると, (4.1) を満たし, 次の (4.5) を成立する:

$$(4.5) \quad \langle P(A)v, w \rangle = \varphi(\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}^1 v, w \rangle) \quad (\forall v \in \mathcal{H}_1, \forall w \in \mathcal{H}_2).$$

従って  $A \mapsto P(A)$  は線形であり, このことを求めるものである. 実際  $\forall s \in G$  に対して, (4.5) と  $\varphi$  の左不変性より

$$\begin{aligned}
\langle T_s^2 P(A)u, z \rangle &= \langle P(A)u, \quad \rangle = \varphi(\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u, T_s^2 z \rangle) \\
&= \varphi(\langle T_{sg}^2 A T_{g^{-1}}' u, z \rangle) \\
&= \varphi(\langle T_{sg}^2 A T_{(sg)^{-1}}' \cdot T_s' u, z \rangle) \\
&= \langle P(A) T_s' u, z \rangle \quad (\forall u \in \mathcal{H}_1, \forall z \in \mathcal{H}_2).
\end{aligned}$$

故に  $P(A) \in I(T', T^2)$  である.  $B \in I(T', T^2)$  のときは (4.1) より  $P(B) = B$  になる: により,  $P(P(A)) = P(A)$  である. よって (4.2) が成立する. (4.3) も (4.5) より明らかである. 最後に (4.4) を示そう.  $A \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  とし,  $\{u_i; i \in I\}, \{z_j; j \in J\}$  はそれぞれ  $\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2$  の完全正規直交系とする.  $I_0, J_0 \in I, J$  の任意の有限部分集合とする. このとき

$$\begin{aligned}
\sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} |\langle P(A)u_i, z_j \rangle|^2 &= \sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} |\varphi(\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u_i, z_j \rangle)|^2 \\
&\leq \sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} \varphi(|\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u_i, z_j \rangle|^2) \\
&= \varphi\left(\sum_{i \in I_0} \sum_{j \in J_0} |\langle T_g^2 A T_{g^{-1}}' u_i, z_j \rangle|^2\right) \leq \|A\|^2
\end{aligned}$$

故に  $\|P(A)\| \leq \|A\|$  であり,  $P(A) \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  である. QED.

注意 (1) (A)群  $G$  に対して,  $LIM(CB(G))$  及び  $RIM(CB(G))$  は一般に多くの元を含む. とき  $f \in CB(G)$  に対して, 定数  $\alpha$  が存在して,  $\varphi(f) = \alpha$  ( $\forall \varphi \in LIM(CB(G)) \cup RIM(CB(G))$ ) であるとき,  $f$  は  $\alpha$  に almost convergent であるといひ,  $\alpha \in m(f)$  で表わすことにする.  $\psi \in RIM(CB(G))$  とし, 定理3の記号の下に,  $A \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  に対して  $Q(A) \in \mathcal{L}(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  と

$$(4.6) \quad \langle Q(A)u, z \rangle = \psi(\langle T_{g^{-1}} A T_g' u, z \rangle) \quad (\forall u \in \mathcal{H}_1, \forall z \in \mathcal{H}_2)$$

によって定めると  $Q(A) \in I(T^1, T^2)$  になる. いま  $T^1$  と  $T^2$  は disjoint i.e.  $I(T^1, T^2) = \{0\}$  であるとき, 行列要素系  $\{\langle T_g^1 v_1, v_2 \rangle; v_i \in \mathcal{H}_i (i=1,2)\}$  及び  $\{\langle T_g^2 z_1, z_2 \rangle; z_i (i=1,2)\}$  に対して次の直交関係が成立する:

$$(4.7) \quad m(\langle T_g^1 v_1, v_2 \rangle, \overline{\langle T_g^2 z_1, z_2 \rangle}) = 0.$$

これは (4.5), (4.6) にて  $A$  として  $\lambda \geq 1$  のものを代入し,  $P(A) = Q(A) = 0$  なることよりえられる.

(2)  $G$  が  $(A)$  群でなくても, 定理3の記号の下で次のことが成立する (酒井 [12]): " $\forall A \in HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  に対して  $HS-\bar{Co}(T_g^1 \cdot A T_g^{-1}; g \in G) \cap I(T^1, T^2)$  は一真  $P(A)$  になり, 写像  $A \rightarrow P(A)$  は線形である. ここで  $HS-\bar{Co}(B)$  は  $Co(B) \subset HS(\mathcal{H}_1, \mathcal{H}_2)$  の Hilbert-Schmidt ノルムに関する closure である."

いま Hilbert 空間  $\mathcal{H}$  上の von Neumann 作用素代数  $\mathcal{O}$  にて,  $\mathcal{O}$  に属する unitary 作用素の全体を  $\mathcal{O}^u$ ,  $\mathcal{O}$  の commutant を  $\mathcal{O}'$  とする.

定義2  $\mathcal{O}$  が性質  $P$  をもつとは,  $\forall A \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$  に対して,  $wop-\bar{Co}(\cup A \cup^*; A \in \mathcal{O}^u)$  が  $\mathcal{O}'$  と共通真をもつときをいう.

(J. Schwartz [14] による).

$G$  の unitary 表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$  に対して,  $\{T_g; g \in G\}$  によって生成される von Neumann 作用素代数を  $\mathcal{O}(T)$  とかくことにすると,

$$(4.9) \quad \mathcal{O}(T) = \{T_g; g \in G\}'' , \mathcal{O}(T)' = I(T, T), \{T_g; g \in G\} \subseteq \mathcal{O}(T)^u$$

である。

定理 4 (A)群  $G$  の連続な unitary 表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$  に対して,  $\mathcal{O}(T)$  は性質 P をもつ。

証明 定理 3 より,  $\mathcal{L}(\mathcal{H})$  上の線形写像  $P$  で,  $\forall A \in \mathcal{L}(\mathcal{H})$  に対して,  $P(A) \in \text{wop-}\overline{\text{Co}}(T_g A T_g^{-1}; g \in G) \cap \mathcal{I}(T, T)$  なるものが存在する。従って (4.9) より

$$P(A) \in \text{wop-}\overline{\text{Co}}(\cup A \cup^*; \cup \in \mathcal{O}(T)^{\cup}) \cap \mathcal{O}(T)'$$

となり,  $\mathcal{O}(T)$  は性質 P をもつ。

QED.

注意 デスクリット群  $G$  が (A)群 であるための条件は  $G$  の左正則表現によって生成される von Neumann 作用素代数が性質 P をもつことである。これは S. Sakai [13, p. 210] で示されている。

§5 Glicksberg-Reiter の等式 &  $u$ -invariant extension property

§§ 3, 4 の結果はいずれも  $CB(G)$  上の左不変平均に関する積分も考えることによつて之られたものである。この § では  $CB(G)$  上の右不変平均の応用例を紹介する。以下: この § では  $V$  は Banach 空間で,  $G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  は弱連続かつ

$$(5.1) \quad \sup \{ \|T_g\|; g \in G \} \leq 1$$

をみたすものとする。この様な表現  $T$  に対して,  $\{T_g v - v; g \in G, v \in V\}$  より生成される  $V$  の閉線形部分空間を  $H(T, V)$ ,  $\forall v \in V$

に対して,  $C_G(v) \equiv \overline{C_0}(T_g v; g \in G)$  とおく. このとき  $\forall v \in V$  に対して  $C_0(T_g v; g \in G) \subseteq v + H(T, V)$  であるから, 次の不等式 (5.2) が成立する:

$$(5.2) \quad d(v, H(T, V)) \leq d(0, C_G(v)) \quad (\forall v \in V).$$

ここで  $d$  は  $V$  の ノルム によって定義される距離である.

定義 3  $G$  の表現  $T$  に対して, 次の等式 (Glicksberg-Reiter の等式):

$$(5.3) \quad d(v, H(T, V)) = d(0, C_G(v)) \quad (v \in V)$$

が成立するとき, 表現  $T$  は性質 (GR) をもつという.

定理 5 (Glicksberg [4], Reiter [8])  $A$  群  $G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  は性質 (GR) をもつ.

証明 (5.2) より (5.3) にて " $\geq$ " が成立する: と示せばよい. 更に  $v \in V$  に対して,  $d_0 \equiv d(0, C_G(v)) > 0$  の場合に限ってよい. このとき  $z_0 \in V^*$  で

$$(5.4) \quad \operatorname{Re} \langle f, z_0 \rangle \geq 1 \quad (\forall f \in C_G(v)), \quad \|z_0\| = 1/d_0$$

なるものが存在する. (H. Reiter [8, Lemma A]). 一方  $\varphi \in \operatorname{RIM}(\operatorname{CB}(G))$  とすると, 補題 5 より,  $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V^*)$  で

$$(5.5) \quad \langle v, \varphi(T^*)z \rangle = \varphi(\langle T_g v, z \rangle) \quad (\forall (v, z) \in V \times V^*), \quad \|\varphi(T^*)\| \leq 1$$

なるものが存在する.  $\varphi$  の右不変性より,  $\forall (f, z) \in V \times V^*$  及  $u, \forall s \in G$  に対して

$$\langle T_s f - f, \varphi(T^*)z \rangle = \varphi_g(\langle T_g s f - T_g f, z \rangle) = 0.$$



従って  $\langle h, \varphi(T^*)z \rangle = 0 \quad (\forall h \in H(T, V), \forall z \in V^*)$ . この

と (5.4), (5.5), (1.6) より,  $\forall h \in H(T, V)$  に対して

$$\begin{aligned} \|v - h\| &\geq d_0 |\langle v - h, \varphi(T^*)z_0 \rangle| = d_0 |\langle v, \varphi(T^*)z_0 \rangle| \\ &\geq d_0 \operatorname{Re} \langle v, \varphi(T^*)z_0 \rangle = d_0 \operatorname{Re} \varphi(\langle T_g v, z_0 \rangle) \\ &= d_0 \varphi(\operatorname{Re} \langle T_g v, z_0 \rangle) \geq d_0 \end{aligned}$$

故に  $d(v, H(T, V)) = \inf \{\|v - h\|; h \in H(T, V)\} \geq d_0 = d(0, C_g(v))$ . QED.

いま  $G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  に対して,  $W$  は  $V$  の閉線形部分空間で  $T_g(W) \subseteq W \quad (\forall g \in G)$  なるものとし,  $z_0 \in W^*$  は  $\langle T_g f, z_0 \rangle = \langle f, z_0 \rangle \quad (\forall g \in G, \forall f \in W)$  なるものとする. このとき  $\{W, z_0\}$  を表現  $T$  の不変系という: とにする.

定義 4  $G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  の任意の不変系  $\{W, z_0\}$  に対して,  $z \in V^*$  で

$$(5.6) \quad \langle T_g v, z \rangle = \langle v, z \rangle \quad (\forall g \in G, \forall v \in V)$$

$$(5.7) \quad z|_W = z_0, \quad \|z\| = \|z_0\|$$

なるものが存在するとき, 表現  $T$  は invariant extension property ((IEP) と略記) をもつという.

定理 6 (A) 群  $G$  の表現  $T: G \ni g \mapsto T_g \in \mathcal{L}(V)$  は (IEP) をもつ.

証明  $\{W, z_0\}$  は表現  $T$  の不変系とすると, Hahn-Banach の定理より  $z \in V^*$  で  $z|_W = z_0, \|z\| = \|z_0\|$  なるものが存在する. いま  $\varphi \in \operatorname{RIM}(CB(G))$  とし,  $\varphi(T^*) \in \mathcal{L}(V^*)$  は (5.5) で与えられるものとする. このとき  $z = \varphi(T^*)\tilde{z} \in V^*$  が求める  $z_0$

の拡張になっている。実際  $\forall s \in G$  及  $w \in W$   $\forall f \in V$  に対して

$$\langle T_s f, z \rangle = \varphi_g(\langle T_{gs} f, \tilde{z} \rangle) = \varphi_g(\langle T_g f, \tilde{z} \rangle) = \langle f, z \rangle$$

だから  $z$  は (5.6) をみたす。また  $f \in W$  とすると

$$\begin{aligned} \langle f, z \rangle &= \varphi(\langle T_g f, \tilde{z} \rangle) = \varphi(\langle T_g f, z_0 \rangle) = \varphi(\langle f, z_0 \rangle) \\ &= \langle f, z_0 \rangle \end{aligned}$$

より  $z|_W = z_0$  である。更に  $\|z_0\| \leq \|z\| = \|\varphi(T^*)\tilde{z}\| \leq \|\tilde{z}\| = \|z_0\|$

より  $\|z\| = \|z_0\|$  となり (5.7) が成立する。 QED.

注意 R.J. Silverman [15] は,  $B(G)$  が amenable になる群について, 定理 6 よりもより一般的な invariant extension property を論じている。

おわりに

この報告では  $CB(G)$  が amenable になる場合,  $G$  の線形表現のもっと特徴的な性質を論じてきたが, 一般に  $B(G)$  の (1.1) ~ (1.3) をみたす内線形部分空間  $\Omega$  が left or right amenable になっているとき,  $\Omega$  上の左又は右不変平均に関する積分を考へることにより §3 ~ §5 と類似の議論を展開することが出来る (酒井 [11]). 更にこの理論と  $WAP(G)$  がいつも amenable になることを結合すると任意の位相群  $G$  のある種の線形表現に対して成立するいくつかの性質が導かれる (酒井 [12]).

## References

- [1] Burckel, R.B.: Weakly almost periodic functions on semigroups, Gordon and Breach, New York, (1970).
- [2] Day, M.M.: Means for the bounded functions and ergodicity of the bounded representations of semigroups, Trans. Amer. Math. Soc., 69(1950), 276-291.
- [3] Dixmier, J.: Les moyennes invariantes dans les semigroupes et leur applications, Acta Sci. Math. (Szeged), 12(1950), 213-227.
- [4] Glickesberg, J.: On convex hulls of translates, Pacific J. Math., 13(1963), 97-113.
- [5] Greenleaf, F.P.: Invariant means on topological groups, Van Nostrand, New York, (1969).
- [6] Guichardet, A.: Sur la cohomologie des groupes topologiques, Bul. Sci. Math., 95(1971), 161-176.
- [7] Nakamura, M. and Z. Takeda, : Group representation and Banach Limit, Tôhoku Math. J., 3(1951), 132-135.
- [8] Reiter, H.: On some properties of locally compact groups, Indag. Math., 27(1965), 697-701.
- [9] \_\_\_\_\_: Classical harmonic analysis and locally compact groups, Oxford Mathematical monographs, (1968).
- [10] Rickert, N.W.: Some properties of locally compact groups, J. Austral. Math. Soc., 7(1967), 433-454.
- [11] Sakai, K.: On linear representations of amenable groups, (to appear in Science Report of Kagoshima Univ. 25(1976)).
- [12] \_\_\_\_\_: Applications of the invariant mean on  $WAP(G)$ , (to appear).
- [13] Sakai, S.:  $C^*$ -algebras and  $W^*$ -algebras, Springer, (1971).

- [14] Schwartz, J.: Two finite, non-hyperfinite, non-isomorphic factors, *Comm. Pure Appl. Math.*, 16(1963), 19-26.
- [15] Silverman, R.J.: Means on semigroups and the Hahn-Banach extension property, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 83(1956), 222-237.